

2011年1月12日(水)、柴田 有国際学部教授の最終講義が行われた。同講義は横浜キャンパス 822 教室で行われ、学生・院生を含め約 100 名が聴講した。司会者は同僚の大木昌教授であった。

## 柴田 有教授 最終講義

### 私の文化採集

わたくしは小学生時代のほとんどを病床で過ごしました。その頃の楽しみは昆虫採集で、クロアゲハやカミキリムシの標本を作っていたのです。その体験が潜伏していたのかも知れませんが、大学の教壇に立つようになってから、文化の標本を作ろうと思い立ちました。教室では学生に向かってしばしば「文化」という言葉を口にします。その際、自分が何を言っているのかを少しでも伝えたいと思ったのです。そういう動機から書き綴った小文集も少しずつ出来てきました。最近は大衆芸能にも関心が広がっているのですが、これまでは、生活文化や民俗に関心を寄せてきました。

明治学院大学に国際学部が生まれしたのは 1986 年春のことです。私は学部発足と同時に教授として着任しました。学部の設立準備のために大きな役割を果たされた玉野井芳郎先生のお名前をご存知の方は少なくないと思います。しかし先生は発足直前で亡くなりました。そういう事情があって、新体制は福田敏一学部長、江原望学科主任という形で始まりました。しばらくしてから私は学務委員会(現在の教務委員会)の責任者に任命され、非常に忙しい時期に入りました。委員会では様々な仕事を担当しましたが、主たる課題は、新カリキュラムと授業の現場とをどう調整するかでした。

自己の研究史の上で記憶に残っているのは、この頃プラトンの『シュムポシオン(饗宴)』という作品を読んだことです。ギリシャ語で原典を読む苦労は相当なものでしたが、それに見合った収穫も与えられました。哲学が自分に合っているのであろうかと感じ始めた、その時の不安が今も心によみがえります。その頃の私はすでに 40 歳を越えていたのです。それまでやってきたキリスト教思想史の研究から脱出するだけの勇気がすぐには生まれてきませんでした。そういう落ち着かない気分でした時に支えとなったのは、『シュムポシオン』という作品の発する魅力でした。例えば「恋(エロース)」という言葉に向けられた鮮やかな解釈は、思索への強い刺激となりました。哲学の研究者としてはとても遅いスタート・ラインに着こうとしていたのです。

哲学への憧れは己の知的関心が広がったということであり、それ自体では歓迎すべき変化でした。ところがもう一方で、それは、研究方針上の難問を引き起こしたのです。なぜかと申しますと、国際学部に着任するときの条件として、わたくしは「キリスト教文化論」という科目を担当することになっていたのです。少し説明しますと、「キリスト教文化論」という呼び方が示すとおり、それは文化論を語るべき講義です。文化の研究が不可欠の要件となってきます。ところがそれまでの研究生活で蓄えたものはキリスト教思想史の断片的な知識に過ぎず、その分野で宗教学博士号は取得していたものの、その程度の知識で文化論の講義をするなど、豚に空を飛べとい

うのと同じくらい無理なのです。だから文化の研究と哲学への興味とどう両立させるか、それが難しい問題となったのです。これにはかなり悩まされまして、気持ちのスッキリしない時期が10年位続いたように思います。苦し紛れに当初は研究と教育の二元論で切り抜けようとしてしました。つまり個人の研究面では哲学に力を入れ、大学の講義用には文化の知識を手に入れるという作戦です。しかしこれは思い通りに行きませんでした。毎日の生活の中でそんな余裕はなかったからです。

そういう日々を送っていたのですが、この頃ひとつのすばらしい経験をしました。今日も各地の農村に残っている「講（こう）」の習慣を知りたいと思ったことがそもそものきっかけでした。講は現代の自治会組織よりもはるかに強い紐帯として、農村社会に働いてきた組織です。農村文化のテーマとして講のことを学びたいという気持ちでおりましたが、ある日運良く知人に紹介してもらって、村の農家を訪ねることになりました。何代も古くから続く農家の一室で、ご主人から一時間以上話を伺うことが出来たのです。昔なら名主の階級に入るような人柄を、この人に感じました。私は夢中でその話に耳を傾けました。それまでは農家の年収とか、高齢化とか、反当たりの収量とか、数字で表される外面でしか農村を理解してこなかったことに今さらながら気付くようになったのです。村の長老が語ってくれたことはそんなことではなく、農村の文化の話でした。講の集まりや食事、神社の空間、子どもたちの育ち方、明治の初期にあった一揆の話など、農村を見る私の目はこの時から一変してしまったほどです。それ以来週末には湘南沿線の農村を歩き、地元の方々とも口がきけるようになっていきました。ゼミの学生達と一緒に現地で話を聞いたり、摘果の手伝いをさせてもらったり、数年間はこういう週末を過ごしていました。またそれと平行して国学院大学の民俗学者たちとの交流が生まれ、さらに博物館の学芸員の方々からも色々なことを教えて頂きました。

こうして私は自分の足と自分の目で農村の生活文化を学ぶようになり、一方では漁村や島の生活にも視野を広げていったのです。何しろ知れば知るほど文化の魅力を感じるといった調子ですから、文化採集には惜しげもなく時間を割いていたのです。そしていつの間にか、文化の現象に宿る哲学的な意味を察知していたのです。その一例を挙げれば、「考える」という事柄の深層が見えてきたことです。それ以前の私にとって「考える」とは、人間が意識的、能動的に考えることでした。普段われわれは「これこれの問題を考える」、という言い方をよくします。その場合の「考える」がこれに該当します。これに対し「考える」という事柄には、もうひとつの、もっと深い意味があります。文化共同体の中ではそういう思考が浸透していて、そこに大きな知性とか大きな記憶力の存在を感じる事が出来るのです。共同体の中に自然に生まれた知恵と呼んでも差し支えないでしょう。

そういう「考える」を説明するのに一番便利な方法は標本で示すことではないでしょうか。定義とか概念規定によって固定的に文化の特徴を示す方法はふさわしくないと思います。そういう仕方ではなく、自由な解釈を許容する標本によって、文化の大切な意味を伝えられないか、ということ。そういう意図を理解していただけるなら、次にひとつの実例で、文化の、手製の標本をご覧に入りたいと思います。

## 納得する心

冬の北風が吹き荒ぶ頃、式根島の生活は静かな足取りに変わってゆく。夏のレジャー客で賑わった後の、島民だけの生活に戻ってゆくのである。村のなかはまるで人影が消えたような趣である。しかし外見とは別に人目から隠れた所で、島の活気が赤い火を点している。表面からは見えにくい、漁師の各戸では伊勢えび漁が始まっているのである。漁期は十二月から三月一杯で、専用の網は各戸に枚数の割り当てが定まっている。この漁は明治時代から始まっており、毎年ほぼ一定の水揚げ量が続けてきた。その量は漁師達が長年の経験のなかで見出したものであって、毎年それだけ獲って島の伊勢えびが増えもしなければ減りもしないのだと言う。えび網の枚数割り当てでもここに関係しているらしい。島全体では一漁期で七、八トンの水揚げが続いているが、二、三年前に直撃した大型台風のために、現在は二トンに落ちている。えび漁は島の生活にとって大事な現金収入の源である。

民宿「肥田文」の主人肥田さんは、ベテランの漁師である。冬は伊勢えび漁をやり、それ以外の季節にはタカベ漁に出て行く。夏場は民宿の仕事が忙しいので、それも手伝う。その日の漁の成果が食卓を飾ることになる。そして奥さんは一年を通じて畑作りをやり、作物が民宿客の人気を集めている。つまり半農半漁の生活であり、経済である。島では漁師の家の基本的な生活様式になっている。

朝早く肥田さんの運転する軽トラックが漁港から戻って来る。荷台には、海で引き揚げた網がそのまま山積みになっていて、それを作業場の地面に降ろす。こうして午前中の網外しの作業が始まる。全体として見るとこの作業の主役はどれも女性達であるようだ。網の目が細かいから、手先が器用に、しかも自然に動くようでないとは渉らない。その仕事で不思議に思うのは、人手の調達である。日によって五、六人のこともあれば七、八人のこともある。家族はもちろん総出であるが、近所から民宿の奥さん達や男衆が漁期の間ほぼ毎日、同じ顔ぶれで集まって来る。庭先の軒下などに網を外す人々の輪ができて、地面に積まれた網の山を囲んでいる。それからちょっと顔を出して、一時間も手伝うとまたどこかに行ってしまう人々もいる。余所者の目には不思議に見える人間関係の一面である。



黒潮の寄る式根島とは言ってもこの季節はやはり寒く、風の強い日も少なくない。しかし働く人々の話し声や笑い声は絶えない。網からえびを外す作業はすべて手でやる。慣れないと神経が疲れる。網の目を外すためには、金属の鉤棒が付いた手製の道具も使う。えびの脚が外れたり、目が欠けるとたちまち商品価値が落ちてしまうのである。だから素人にはちょっと手が出せない仕事だと思う。えびを外し終わると船頭さんは、その日の相場を考えながら市場に出荷する。下田の魚市場が主たる販路のようだ。しかし残った者はこれからがもう一仕事である。網にはえびの他に魚介類や海藻類、珊瑚や岩礁のかけらも付いているので、それすべて外さなければならない。

えびの他にも網にかかる獲物がある。それはそれで馬鹿にならない。馬鹿にならないどころか、料亭に持って行けば目の飛び出るほど高級な素材が多い。どう

いう獲物があるかという、魚ではブダイ、オナガ（クロメジナ）、カサゴ、メバル、三ノジ（ニザダイ）、イズスミ、タカノハダイ、オジサンと呼ばれる赤魚。その次に来るのがゾウリエビ、ショウジンガニ、サザエ、ヤドカリ、である。それからテングサも付着している。

えび以外の獲物はすべて、働いた人々に分配される。等分にということではない。近くの民宿から来ている奥さんが「今日は客があるから」と言えば、皆で良いものを持たせてやる。こうして多く貰う者も少ない者も生じる。また多い日も少ない日も出てくるが、すべてその場で分かち合う。「持続可能」という言葉があるが、ここで続いている営みは、科学的分析によって説明されるような性質の持続ではない。人々の心のあり方が、仕事の流れの一部をなしているからである。彼らにこれ以外の報酬はない。結局、長い年月で見れば誰にも不満が残らなくなってきているから、何十年も同じ人々が仕事の手伝いに来るのである。

プラトンは『饗宴』の中で美のアイデアに至る魂の上昇を、ソクラテス、いやディオティマの口から語らせている。美のアイデアに至る第一歩は身体の美しさに打たれることである。しかしやがて性的な情熱は脱皮して、「慣わしと仕事振りの美しさ」に感動するようになるのだ、とディオティマは言う。島の人々の働き振りや分配の仕方を見ていると、まさにこの言葉が彷彿としてくる。

伊勢えびと魚介類を網から外す仕事は、午前中いっぱいかかる。そういう仕事が島のあちこちで冬の間ずっと営まれる、というわけである。さて、ひと仕事終わると昼食である。昼食は網元が振舞うことになっている。労働の後のひと時がまた楽しい。宿の玄関で、皆で一緒に食べながら寛ぐ時間である。肥田文の若奥さんは午前中の作業を途中から外れて、昼の食事を用意し、来た人々に振舞う。毎日なかなかのご馳走で、献立も日々変わってゆく。労働の後の食事は美味しい。

人々の和やかな茶飲み話は味わいが深い。手伝いのお婆さんがもう一人の奥さんと、小学校時代の思い出を話していた。小学校の同級生にバツタを怖がる男の子がいたと言うのである。そこで小娘達は一計を案じて、この男の子を苛めてやろうということになった。その話はすぐにまとまって、細工は流々準備が整った。こうしてついに決行のチャンスが訪れた。男の子が校庭に出て来たとき、役割の当たった女子がバツタを振りかざしてその男の子めがけて走った。男の子は仰天して反対向きに逃げ帰ろうとしたが、あらかじめ示し合わせたとおり、その方向からも別の娘がバツタを振りかざして突き進んで行ったのだ。それを見た男の子は途方に暮れて地面にしゃがみ、泣き出してしまったので、娘達は計画の成功を喜び合った。その話を締め括るようにお婆さんは言った、「あいつもいっちゃった」と。現代の都会で聞くいじめと違って、この話はどこか笑える。

昼食の後宿の奥さんは、いつの間にか折り詰めにしてあったご馳走の残りを、その日の分配が少なかった人に持たせてやる。こうして皆は散って行き、午前中の生活にも区切りが入る。しかし船頭さんは別である。午後早々にまた網を入れるために漁港に向かう。伝馬船のような小型の漁船に二人相乗りで、それぞれが定められた枚数の網を持ち込む。網入れは自分達の良く知っているポイントに一枚ずつ下ろしていくが、ポイントの選び方でえびの漁獲高が変わってくる。そこで腕の良し悪しが出てくるわけである。

その網をまた揚げるのは、翌朝四時頃からである。真冬の日の出は遅いから、夜も明けぬ暗闇

の中で、照明もなしで、磯の周りを操船しながら網を回収する。これは至難の業である。船頭さんに「よく網を忘れないね」と言ったら、「体が覚えているから体の言うとおりにやると、網を打った場所に行き着く」と教えてくれた。「体が覚えている」、この言葉には深く考えさせられるものがある。網入れから網揚げまでのすべての作業は共同作業でやる。えびの売り上げも折半にする。どちらの網にかかったかという区別をしない。だから二人の漁師の相性は何よりも大事な条件になる。肥田文の船頭は三十年来一緒にやってきた相乗りを数年前に失い、今は隣の民宿の主人と組んでいる。

島の伊勢えび漁は冬の間四ヶ月ずっと続けられる。しかし仕事休みの期間も入っている。満月の前後は十日間ぐらい皆で一緒に休む。月の光が明るすぎて伊勢えびが警戒し、巣から出て来ないからである。では曇りの日ならば良いかというと、曇りであっても漁は休みである。小さな打算是しない。これで漁師とその家族の健康が守られるのだろう。これは休息の文化である。文化は複雑な釣り合いによって成立しているとするなら、ここでは漁獲と健康が見事に釣り合っているのである。漁師達はそのことを、長い年月の経験を通じて知っているようである。

(式根島のえび漁)